

御伽草子、その一

守り
神様

錦織
近

悲しいときはいつも、右手をぎゅっと握った。その手の先にはゴワゴワとしたシワだらけの皮膚があり、その皮膚の下にはぼってりとした肉の厚みがあり、皮膚と肉に挟まれたわずかな部分には、脈々と流れる血の道の温かさがあった。決して姿は見えないが、物心がついたときから、その感触はあった。右手をつないでくれているだれかが、確かにいた。

覚えてはいない、だれかの手のぬくもり。けれども心のどこか遠いところで記憶している、懐かしい手のぬくもり…。

* * * * *

おまへの母ちゃん、インラン女
おまへのシミーズ、真っ黒け
おまへの弁当、犬のえさ

小学校の一時期、私はいじめられっ子だった。

節をつけた嫌がらせの文句が、教室中にとどろく。せせら笑う声や声が突き刺さって、心が針餛飩みたいになる。それでもぜったいに、泣いたりはしない。唇を噛み締めたりもしない。「泣いたら負けだ。笑え、笑え」。右手をつないでいるだれかが、そういつているような気がしたから。だからぐっところえて、えへら、えへら。笑っているようで泣いているような顔は、きっと気味悪かったに違いない。えへら、えへら。その顔にむかって何度も何度も、消しゴムを投げつけられたものだったっけ。

おまへの母ちゃん、インラン女
おまへのシミーズ、真っ黒け
おまへの弁当、犬のえさ

毎日のように聞かされてきた嫌な歌だったけれど、布団に入ってから耳の奥で鳴り響くほど聞かされてきた残酷な歌だったけれど、それでも「インラン女」だけは、どうにも意味がわからなかった。きつと言っている本人たちも、意味なんかわかっちゃいなかったんだろう。

小さいときには、そういうことである。私へのあざけ笑いやせせら笑いが流行る前には、天然パーマの髪を短く刈り上げていて目と目の間が大きく開いていて、いつも大きなフリルの襟がついた薄汚れたブラウスを着ていた宮本さんが男の子たちから「ハクチキン」って呼ばれてた。彼女が近づくと、男の子たちは「うわあ、ハクチキンだ」と言って笑いながら、大げさに逃げ惑っていた。

私はてっきり、白いニワトリのことだと思い、それがナンデ忌まわしい対象になるのかわからないまま、一緒になって笑っていたような記憶がある。

「ハクチキン」が「白痴菌」であり、それが母子家庭で貧乏で勉強もできなかった彼女のことを最大限にののしる言葉だったということ、あとになって知った。

ごめんね、ごめんね宮本さん。

そう、小さいころってわからないぶん残酷で、そのこと、私もあとになって知ったんだ。

小学校二年のときに、かあさんがいなくなり、「若い男とカケオチしたらしい」と近所中でうわさになった。カケオチってというのは男の人と女の人がいっしょにどこかへ行っちゃうことらしいよと、仲良しの愁ちゃんが眉をひそめて教えてくれた。あの日以来だ、「おまえのかあちゃん、インラン女」なんてヘンテコな歌を歌われるようになったのは。

とうさんが毎日洗濯したりご飯を作ってくれたから、かあさんがいなくても私のシミーズが真っ黒だったり、遠足のお弁当が犬のえさみたいにひどかったりしたことはない。きっと、そう表現することで、母なし子を馬鹿にしたのだろう。

インラン女の意味はわからなくても、馬鹿にされていることはわかる。

悲しかった。幼心にも、死んでしまいたいと思った。

そんなとき、私は右手につながるだれかの手のひらをぎゅうっと握りしめた。決してすべすべと滑らかでやわらかい感触ではなかったけれど、どんなに強く握っても湿り気を帯びずカサカサと乾ききった感触しかなかったけれど、握り返してくれる温かい手のひらは私の悲しみをどこ、どんどこと、吸い取ってくれるのだった。

* * * * *

私には三人の幼馴染みがいた。歳はちょっとずつ違うけれど、家が近かったので学校に上がる前からいつも一緒に遊んでいた。かあさんがいなくなってしまうてからしばらくは、家の人から私と遊ぶことを禁じられていたようだったが、それもほんのわずかな期間だった。近所の人たちが私やとうさんを見てひそひそとうわさ話をするのにも飽きたころから、また仲良く遊ぶようになったのだった。

一つ上の愁ちゃんの背中には、顔のない女の人があった。顔はないけれど、その人はいつもふくよかに笑っているように感じた。

ふたつ年下の仙ちゃんの左足首には、おっかない形相をしたおじいさんがつかまっていた。何者かを睨みつけているような二つの見開いた目はおっかなかったけれど、そのおじいさんは、私ら友だちをひどい目に合わせることはなかった。

一つ下の杏ちゃん。その肩越しの、ちょっと離れたところには、おこっているのか、笑っているのか、泣いているのかわからない、そのうえ男の人なのか女の人なのか年とっているのか子どもなのかわからない、そんな人が立っていた。でも、その人が杏ちゃんを見つめる目の穏やかさだけは不思議とわかった。

私の目にはちゃんと見えていた、そんな《おぼろげな人》。でも、それがほかのみんなには見えないらしいと知ったのは、小学校に上がる少し前のことだったか。あの子の後ろにいる人はだあれと聞いても、とうさんも、そのころまだ家にいたかあさんも、私と私の視線の先を交互に見ながら、しまいには気味悪そうな顔を両肩にぐいっと埋めて「馬鹿なことを言うんじゃない」と、吐き捨てるように言う。

愁ちゃんの背中に張りついている人はだあれ？ 仙ちゃんの左足首につかまっている人はだあれ？ 杏ちゃんの後ろに立っている人はだあれ？ そして私が悲しいときにぎゅうっと握りしめた右手を温かく握り返してくれるのは、いったいだあれ？

「そういうことはだれにも言うな」ととうさんが言うから黙っていることにしたけれど、私にはちゃんと見えていた。ずっとずっと気になっていた。

杏ちゃんと二人で毬つきをしていたときのことだった。転がっていった毬を追いかけていったら電信柱の陰からぬうっと男の人が出てきてこう言った。

「おまえの目にぼんやりと見えているのは、守り神様なんだよ」

にっと笑った男の人の口に歯が一本もなかったのはちょっと気味が悪かったけれど、その人の言葉はすっと心に落ちた。そうか、あれは守り神様だったんだ。小さな子どもにはみんな、守り神様がついているんだ。子どもがちゃあんと大きくなるように、死んだおじいちゃんやおばあちゃんや、もっともっと前のご先祖さまたちが、そばでやさしく見守ってくれているんだ。

私の右手の先にある温かい手の主も、守り神様に違いない。ね、そうでしょう？と右手をギュッと握ってみたら、その手もやさしく握り返してくれた。嬉しくて嬉しくて、でもとうさんにきつく言われていたから、みんなに自慢するのは我慢したけれど。

私にはいつも手をつないでくれている温かい守り神様がいる。そう信じていたからこそ、その少しあとにかあさんがいなくなっても、学校でどんな嫌がらせの歌を歌われようとも、消しゴムを投げつけられようとも、えへらえへらと笑っていられたのだった。

* * * * *

三年生になって、私をいじめるヘンテコな歌が忘れられたころ、転校生がやってきた。吉野落子ちゃんだ。落子ちゃんは長くてつやのある髪の毛を頭のとっぺんの少し後ろのほうで一つにまとめて、そこに、桃色のリボンを飾っていた。白くてまあい頬っぺたにはぱっこりと抉ったみみたいな笑窪があった。私にも落子ちゃんみたいな笑窪をください。七夕の夜にそんな願い事をしたこと、いまでも覚えている。

リボンと笑窪と真っ白な肌。おまけにおウチにテレビがあるらしい落子ちゃんは、みんなの憧れの的だった。けれども、そんな落子ちゃんが持っていなかったもの。それは、守り神様だった。

。

はじめて露子ちゃんのおうちに遊びに行ったときのことだ。ドーナッツに紅茶なんてお洒落なおやつを出されて、私はいくらか緊張していた。でも、着せ替え人形で遊んでいるうちに緊張もほどけてきて、二人でころころと笑いあって、ふっと気づいた。あれ、露子ちゃんのそばに《おぼろげな人》がない？ どこだろう。部屋中を見回してみたけれど、とうとう、それを見ることはなかった。

それから一年もしないうちに、露子ちゃんは死んだ。肺炎をこじらせて、あっけなく死んでしまった。

子どもにはみんな守り神様がついていて、その子が大きくなるのを見守ってくれているんだと信じていたけれど、そうじゃない子もいたのだ。

私はあさってで十五歳になる。最近はずいぶん悲しいときだけでなく、嬉しいことや褒めてもらいたいことがあるときも、右手をぎゅっと握りしめる。そのたびに「よくやった」「えらい、えらい」とでも言うように、温かく握り返してくれる守り神様の手。その感触は小さいころに比べたらずいぶん頼りなくなってしまうけれど、まだ、私の手の先にある。

私が隣町に引っ越したこともあって幼馴染みの三人とは会うこともなくなってしまったけれど、この間、駅の近くで偶然、仙ちゃんを見かけた。その左足首にはまだ、あのおっかないおじいさんの姿があった。小学校のころのようにはっきりと見えることはなく、《おぼろげな人》はさらに薄っすらとしてしまったけれど、それでもまだ、あの姿を認めることができた。

腕白で周りの人たちを困らせているらしい仙ちゃん。その勇ましい足取りにずるずる、ずるずると引きずられるような格好ではあるけれど、おっかないおじいさんは道端の小石を蹴飛ばし草を枯らすくらいのもので、仙ちゃんが進もうとする方向を睨みつけていた。

いまは町の厄介者みないになっている仙ちゃんだけれど、命の力は強いみたいだ。これから大きい人になっていくんだろう。

あさっての十五歳の誕生日が過ぎたら、私は就職のため故郷を離れる。大人になったら《おぼろげな人》を見ることもなくなり、この手の先の感触も消えてしまうのかもしれない。けれどももう少しだけ、と私は私の守り神様をお願いしよう。故郷を離れたら、きっと寂しい。家に帰りたくて、とうさんに会いたくて、泣いてしまうかもしれない。

だからもう少しだけ、私の右手につながっていてくださいと。

いつか右手をぎゅっと握らなくても笑って生きていけるくらい、強くなりますからと。